

「ものは言いよう」

JJ1SXA 池

私には、子供は一人もいませんが、私も、SXBも兄弟姉妹は多く、少子化時代とは言え、甥・姪は合計14人います。

私の末の妹は、英国人と結婚し、娘が一人いますので、私には、いわゆる混血の姪がいるのです。

彼女もそろそろ20代後半になりましたが、小学校2年にインターナショナルスクールに転校する前の、地元の小学校1年生の時は、今では殆ど死後となった「アイノコ」などと言われたそうです、今と違って、まだ周りには外人さんの数も少なかった時代だったので当然だったのでしょうか。

「アイノコ」はともあれ、混血は一般に「ハーフ」と呼ばれますし、私も、「ハーフ」という言葉は何の抵抗も無く使っていましたが、インターナショナルスクールでは、あなた達は、ハーフでは無く、「ダブル」だよと教えられたそうです。

2つの国の文化をダブルで受け継いでいるという意味のようです。

考えてみると、ハーフという言葉は、何と無く、何か欠けている、何か足りないというような気がしますが、ダブルですと、得をしたような気になります。

このように、同じ事象を言い表すときに、言い方によっては大きく受け取り方が違ってきます。

高齢化社会の現代は、元気な老人が多数活躍していますが、高齢者は、老人・お年寄りではなく、熟年とか、光り輝いているような気になれる、シルバー世代という表現の方が良いのでしょうか。

また、身体や精神に障害を持つ人達を表す言葉も、従来の使い方は差別用語として禁じられていますね。

まさに、昔から良く言われてきた、「ものは言いよう」という言葉は大切なものだと痛感する次第です。

我々日常生活において無意識に使う言葉も、相手によっては、非常に傷つけられる事もあるのだということを知り、言葉を大切に扱うように心がけ、人間関係を大事にしたいものですね。

第 53 号(平成 14 年 7 月発行)掲載